

## カルメルの小窓（2010年12月）

### 十字架の聖ヨハネ司祭教会博士（12月14日祭日）

#### 《小伝》

十字架の聖ヨハネは、16世紀のスペインの神秘家として仰がれている聖人であり、『教会博士』でもあります。彼の簡単な略歴を見ますと、1542年にスペインのカスティーリャにあるフォンティベッコという小さな村で貧しい家庭の中で生まれました。ほどなくして、彼の父（ゴンサロ・デ・イエペス）と二番目の兄（ルイス・デ・イエペス）を失います。その後、母親（カタリナ・アレバレス）の手で兄のフランシスコと共に育てられます。貧しい家庭のため、職を探して、アレバッコという町からメディナ・デル・カンポに移り住み、貧しいながらも幸せな家族の中で育ちました。

このメディナ・デル・カンポにおいて、彼は兄のフランシスコ夫妻（アレバロの町ですでに結婚している）と母カタリナの援助を得て、イエズス会の学校に勉強に行くこととなります（1559－1563年）。一方、学費のために貧しい婦人のための病院に働くようにもなります。そして彼は学校の勉学を終えて、近くに創立されたばかりのカルメル会修道院の門を叩き、入会することとなります（1563年）。翌年、1564年に誓願を立てます。この時のヨハネの修道名は聖マチアのヨハネでした。

誓願を立てた後、ヨハネは哲学と神学の勉強するために、サラマンカ大学に行きます（1564－1568）。この間に、カルメル会の総長ルベオ神父が、トレント公会議の刷新をスペインのカルメル会にも吹き込むために訪問していました。サラマンカでヨハネに面会したことは確かであると歴史家たちは推察しています。その後、ルベオ総長はアビラのテレサに出会い、テレサの改革カルメル修道院の創立を許可しますし、男子修道院の創立も許可します。しかし、ヨハネ神学生はサラマンカの生活において、カルトウジオ会への移籍を考えていました。より観想的な修道院と知られている修道会ですが、メディナ・デル・カンポでのテレサとの最初の出会いにより、カルメル会に留まり、テレサの改革カルメルの援助者となります。翌年、1668年11月28日にドゥルエロにてテレサ的カルメルの男子修道院が創立されますが、その時に、三人のカルメル会士がカルメル会緩和会則の放棄と原始会則の宣立により、新しい修道名をもらいま

す。このときから十字架のヨハネという名前と呼ばれ始めます。三人の修道名を合わせると「十字架のイエス・キリスト」となります。

この生活は、従来のカルメル会の会憲に従ってはいますが、会則は原始会則を持ち、典礼的修道生活のリズムの規定はテレサの初めの会憲の一部を持ってきて生活していましたので、『観想的カルメル会』と言われていました。第二の修道院が、パストラーナに創立され、ここが修練院となり、当時もう一つの有名な大学アルカラ・デ・エナーレスの近くに神学生のための修道院が創立されます。十字架のヨハネは、1571年の少しの間、この修道院の学生長を務めます。ここで言われた彼の有名な言葉に、「司祭になることよりも、真の修道者になりなさい」という名言があります。

この後、アビラのテレサの招きもあり、アビラのエンカルナシオン女子修道院のチャプレンになります。ここに滞在している期間、ヨハネは多くの艱難に会います。テレサ的カルメル修道者と従来のカルメルの修道者の間に軋轢が生じ、十字架のヨハネもメディナ・デル・カンポの修道院に幽閉されることと、第二回目のトレド修道院の幽閉を体験するからです。第二回目の幽閉は過酷で、1577年12月2日から翌年の1578年8月15日前後まで、修道院の一室に幽閉されるからです。しかし、この時にこそ、ヨハネは神の神秘体験を十分に受け、有名な『霊の賛歌』の詩と、その他の多くの詩を作成します。

1578年の8月、トレドの修道院から脱出したヨハネは、アルモドバルの会議の中でアンダルシア（南スペイン）に任命され移り住みます。砂漠の修道院（人里離れた山間の観想修道院）で過ごした後、大学の町、バエサの修道院で過ごし、グラナダのアルハンブラ宮殿の横にあった修道院の院長になります。このグラナダにおいて、十字架のヨハネは四つの大作、『カルメル山登攀』、『霊の賛歌』、『暗夜』、『愛の生ける炎』の作成に手を付けています。また、女子修道院創立と霊的指導にも当たります。このグラナダを拠点に1582年から1588年までアンダルシアの男子カルメル会の創立を行いましたし、女子カルメル会の修道院創立にも援助してきました。また、ポルトガルリスボンにも活動のために訪れています。

あるときには砂漠の修道院に観想中心の生活をし、またあるときには広い大地を歩き回る激しい活動生活をしています。

1588年からセゴビアの修道院に任命され、1591年まで生活します。ここでは

落ち着いた修道生活を送っています。1581年から従来のカルメル修道会から分かれて新しい会憲のもとで生活を始めた男子跣足カルメル修道会の修士たちの中にいた十字架のヨハネですが、この時期（セゴビア）は、この新しいグループの第一顧問を務めていました。この新しいグループの長上はニコラス・ドリア修士ですが、彼はイタリア人であり、この新しいグループをカルメル修道会から独立した新しい修道会として立ち上げることに志していました。それもドリア修士の考えを反映した規則を持ち出しました。このような中で、新しいグループの中でも亀裂が生じます。この中であって、十字架のヨハネは、ニコラス・ドリアの意見に異議を申し立てた関係上、ドリア修士からメキシコへ行くように任命されます。最終的にはヨハネはその任命を受け入れ、メキシコ出発の準備のために南の砂漠修道院（ペニューエラ）に移転されますが、そこで病気になり、最終的にウベダの修道院で1591年12月14日の零時ごろ近くの教会の鐘と共に帰天されます。

《十字架の聖ヨハネの詩のひとつ『信仰によって神を識ることを喜ぶ魂の詩』の紹介》

この詩は、十字架の聖ヨハネがトレドの幽閉時に書かれたものです。ちょうど、1578年のトレドの聖体行列を行っているときの様子から書かれたものと言われています。このトレドの牢獄の中で、十字架の聖ヨハネは、『ロマンセ』という詩と、『霊の賛歌』の31篇の作詩を行っていますが、『ロマンセ』の中では三位一体の神の人間への救いの詩が歌っていますし、『霊の賛歌』は花婿であるキリストと花嫁である靈魂の一致への詩が歌われている中で、この『信仰によって神を識ることを喜ぶ魂の詩』はエウカリスティアの泉について歌っています。確かに十字架の聖ヨハネの面前にエウカリスティア（ご聖体）がありませんでしたが、トレドの町の中で行列するエウカリスティアの足音は聞こえていたに違いありません。まさしく霊的（信仰をもって）に聖体を拝領していたことでしょう。この中で生まれたこの詩は、十字架の聖ヨハネのキリストに対する信頼を見ることができます。この時期、十字架の聖ヨハネは、ミサを捧げることが禁じられていたからです。

信仰によって神を識ることを喜ぶ魂の詩

こんこんと湧いて流れる泉を  
わたしは何とよく知っていることか  
夜であるのに。

この永遠の泉は 隠れているのが  
その 在りかを わたしはよく知っている  
夜であるのに

その始まりを わたしは知らない 始まりはないのだから  
しかし すべての始まりは そこから来ると わたしは知っている  
夜であるのに

こんなに美しいものは あり得ないことを  
そして 天も地も ここから飲んでいと わたしは知っている。  
夜であるのに

その泉には 底がなく  
誰一人 歩いて渡れないと わたしは知っている。  
夜であるのに

その澄み切った明るさは 決して曇ることなく  
一切の光は ここから来たと わたしは知っている  
夜であるのに

その流れは あまりにも豊かなので  
地獄も 天国も 人々も潤すと わたしは知っている  
夜であるのに

この泉から 生ずる流れは  
かくも 広々として 力強いと わたしはよく知っている  
夜であるのに

この両者のどちらも 己れから出る この流れに  
先だつてあるのではないと わたしは知っている  
夜であるのに

この永遠の泉は わたしたちに いのちを与えようと  
生けるパンのうちに 隠れていると わたしは知っている  
夜であるのに

あそこで、泉は 万物に 呼びかけている  
そして 万物は この水にみちたりている、闇の中でも  
夜だから

わたしは望む この生ける泉を  
このパンのうちに わたしは 見ている  
夜であるのに

<十字架の聖ヨハネ詩集：ルシアン・マリー編集 新世社 2003 より>

(文責：松田浩一神父)